

未来へつなぐ

ながのSDGs

info rmation

vol. 5

令和7年度長野市の取組
(SDGsの推進)

長野市

「親子で学ぼう！夏休みSDGsハッ！ケンバスツアー」の実施

2025年8月、小学生とその保護者を対象に、バスツアーを実施しました。目的は、①長野市内の身近な企業や団体のSDGsの取組を学び、地域の魅力を再発見し、地域への愛着を育むこと、②親子で体験や活動を行うことで、世代を超えたSDGsの理解促進を図ることです。

1日目(8月8日) 自然でハッ！ケンコース

ガーデン散策、環境実験等

SDGs
ハッ！ケン



Workcation Place 花伝舎 (ミヤマ株式会社)

総合環境企業ミヤマ株式会社の研修施設で、戸隠高原に約7,800m²の敷地を持ち、四季折々に約500種類の植物が楽しめるガーデンです。生物多様性の保全が図られる区域として、環境省による「自然共生サイト」に認定されています。

住所 長野市戸隠2541-5



◆生物多様性 自然と人が、ともに生きる社会へ

まず最初に向かったのはミヤマ株式会社 Workcation Place 花伝舎。

4つの庭から構成されており、四季折々の草花や秋の紅葉、希少な高山植物、ハーブの香りを楽しむことができる場所です。



▲ハーブ類やバラを植栽した香りの庭

この日、花伝舎には「ヒメシロチョウ」がいました。ヒメシロチョウは、環境省のレッドリスト絶滅危惧IB類（近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの）にカテゴリーされる生き物で、丁寧に管理された良質な草原にのみ生き残っており、県内でも姿を消す地域が後を絶ちません。参加者は、環境が大切に維持管理されることで、生物多様性の保全が図られていることを学びました。

その後、生物多様性やSDGsについての講義を受講。生物多様性を守るためには「土」がとても大事な要素の一つで、土壌約1gあたり1000万種以上もの微生物が存在しているとされており、お互いに作用しあって土壌の栄養のバランスを保っていること、ミミズなどと共生することで、自然のサイクルを維持する働きがあることを学びました。参加者は、生物多様性や生態系の循環が、身近な長野の自然の維持のためにいかに重要か、実感しました。

◆再生可能エネルギーの未来

次に微細藻類であるスピルリナから青色色素フィコシアニン抽出する実験を行いました。スピルリナは水に溶ける特徴があるため、水を入れてろ過すると青い色素、エタノールを入れてろ過すると緑の色素が抽出できます。「微細藻類」は海藻のワカメや昆布の仲間、太古の時代より地球に存在し、現在に至るまで、地球上の生態系において重要な役割を果たしています。また、バイオマス（生物資源）原料として大きな注目を集めており、石油由来のディーゼル燃料やジェット燃料に代替できる燃料であるとも考えられています。また、手回し発電や風力発電、化学電池など、様々な方法で発電する実験も行いました。これらの実験は、参加者が再生可能エネルギーの未来を体感できる、貴重な機会となりました。

SDGs
ハッ！ケン



▲青色色素フィコシアニンを抽出する実験



▲手回し発電実験



▲鹿肉ホットサンド

◆命を無駄にしない地域資源、ジビエ

お昼はnagano forest villageでジビエ（鹿肉）のホットサンドを食べました。普段はジビエと聞くと抵抗があったという参加者も、食べてみると食べやすかったと感想がありました。

鹿や猪が増えすぎてしまい、農作物への被害が大きな問題となっています。“害獣駆除”で終わってしまうはずの野生動物を資源として有効に活用することで、食料確保や農林業を守ることもつながります。

森の駅 Daizahoushi

住所 長野市大字上ヶ屋271-608

バイオマス発電所見学



▲いづなお山の発電所

宮澤木材産業株式会社

長野市街地の北西約9kmに位置し、地域林業の振興と次世代につなぐ森林づくりを目的として、地域と一体となりながら長野県北信地域の森林の集約化および計画的な森林整備を推進しています。

住所 長野県長野市中曾根2188-5



▲木材チップへ加工する過程

◆カーボンニュートラルへの取組

宮澤木材産業株式会社では、長野市森林経営管理計画に基づき、森林施業の実施と森林保護の推進を図るとともに、施業地から搬出される未利用木材を活用した木質バイオマス発電を行っています。「地域で使用するエネルギーは地域の資源で賄う」ことを目標に、エネルギーの地産地消を実現。施業地から排出される未利用木材・間伐材・廃棄材・端材をすべてチップ化し、長野森林資源利用事業協同組合が運営するバイオマス発電所（いづなお山の発電所）へ供給しています。これにより、地域発電の燃料は100%木質バイオマス由来で構成され、建設廃材や隣接製材所から発生する端材も資源化するなど、循環型社会の実現に寄与しています。

◆見学の様子

参加者は、木材チップの製造過程および発電所の管理業務を見学し、森林管理方法や森林との共生について次の説明を受けました。間伐材の多くは従来、利用価値が低く伐採後に森林に放置されていたこと。現在は、森林現場で発生する間伐材や建設現場の廃木材を発電用燃料として有効利用していること。間伐を行うことで森林の健全化や災害防止につながる。木材燃焼によるCO₂排出量は、その木材が成長過程で吸収したCO₂量とほぼ同量であり、大気中の温室効果ガスを増加させないこと（カーボンニュートラル）。参加者は、これらの説明を通じて木質バイオマス発電の意義と森林整備の関係について理解を深めました。



▲発電所の運転管理を見学



▲発電に使用する機械



▲材木を運搬

ダム見学

SDGs
ハッ!ケン



浅川ダム

浅川は標高約2千メートルの飯縄山から千曲川に合流する川で、河川の氾濫による水害が度々発生。2017年、治水対策により流域の被害軽減を図ることを目的として浅川ダムが完成しました。

住所 長野市浅川一ノ瀬



◆安全で、住みやすいまちづくり

浅川ダムは治水専用ダムで、洪水などの水害から人々のいのちや住む場所を守るために、河川の流量を調整しています。この設計は、通常時に水を貯めないことで、ダムで起きやすい富栄養化による水質悪化を防ぐことができ、「環境にやさしいダム」と呼ばれています。ダムには魚道も設置されており、河川環境の保全に寄与しています。こうした設計は自然環境を守りつつ地域住民の安全を確保するという理念に即しており、参加者は洪水調節や環境配慮の工夫を間近に見ることで、地域防災の重要性や自然とのあり方について考える機会となりました。



▲浅川ダムの中（監査廊）



2日目(8月20日) 暮らしてハッ!ケンコース

可燃ごみ処理施設見学

SDGs
ハッ!ケン



▲ごみクレーンバケット模型



ながの環境エネルギーセンター

未来に向けて突き進む『サステナブルEco Ship』～エネルギーと資源が循環する施設をめざして～をコンセプトに「地域の低炭素化に向けた電力の地産地消」、「溶融スラグの有効利用、焼却残渣の資源化による資源循環の促進」、「地域の防災拠点」、「環境教育の起点となる施設」を特徴としています。

住所 長野市松岡2丁目27-1

◆電力の地産地消

ながの環境エネルギーセンターは、長野市を含む6市町村から出た可燃ごみを処理しています。ごみピットでごみを十分に攪拌し、焼却炉に投入して高温で焼却することでダイオキシン類の発生を抑制しつつ、ごみを焼却する際に排出される熱(蒸気)を利用してタービンを回し、発電を行っています。電気は、エネルギーセンターで使用されるほか、長野市立の小中学校・高校や市有施設(約90ヶ所)に販売され、電力の「地産地消」を実現しています。

また、蒸気の熱の一部は隣接するサンマリンながのの温水にも利用され、地域資源の有効活用が図られています。

◆資源循環の促進

ごみ焼却により発生する焼却灰などは溶融されて、コンクリートや道路資材等として利用されるほか、有用な金属を取り出すなど再資源化されています。参加者は家や企業などから集められたごみが収集され、焼却されるまでの工程を見学し、再資源化されたコンクリートなどを近くで見ること、ごみを減らす(Reduce)、再使用する(Reuse)、資源として活用する(Recycle) という3Rの大切さを確認しました。



▲ごみから選別されたメタル・スラグ



▲ごみが運ばれる様子



▲ごみピットでごみを攪拌

不燃ごみ処理施設等見学

SDGs
ハッ!ケン

12
つくる責任
つかう責任



資源再生センター

不燃ごみ・缶・ビン、プラスチック製容器包装、ペットボトルなどをリサイクルできるように中間処理する施設です。再生製品の原材料（資源）としてリサイクル業者へ搬出されています。

住所 長野市松岡2丁目42-1



▲プラスチック製容器包装圧縮施設



▲資源再生センターについての説明 ▲資源化施設入口

◆資源の有効利用

資源再生センターでは、資源化施設とプラスチック製容器包装圧縮梱包施設を見学しました。

資源化施設では、家庭から排出された不燃ごみを、ごみピットから大量につかみだして破碎した後、磁力・風力の選別機により鉄やアルミなどの金属類を回収し、スチール製品やアルミ缶などの材料として搬出しています。また、色ごとに分類されたビンのうち、透明・茶色のは再びガラスビンやガラス製品にするために、その他のビンは、道路の舗装（路盤材）や断熱材の材料として搬出しています。

また、プラスチック製容器包装・ペットボトルの圧縮梱包施設では、汚れがひどく再生に適さないものなどを取り除いた後、ブロック状に圧縮・梱包し、プラスチック製品やユニフォーム用繊維の材料として搬出しています。

不燃ごみなどが再利用される様子を見学した参加者からは、「子どもが分別に協力してくれそう」、「家庭ごみがどのように処理されるのか、実際に見学しながら知れたので良かった」といった声が寄せられ、資源の循環について体感する良い機会となりました。



下水処理場見学



▲▼沈殿設備の見学



▲東部浄化センターについての説明

東部浄化センター

長野市内に8か所ある下水処理場の一つで、昭和56年に運転を開始しました。家庭や企業から排出される汚水を浄化し、千曲川へ放流しています。

住所 長野市大字大豆島4330

SDGs
ハッ!ケン

6
安全な水とトイレ
を世界中に
広げる

14
海の豊かさを
守ろう



◆水の大切さ

東部浄化センターでは、家庭や事業場などから流れてくる汚水を処理施設に導き、千曲川へ放流する過程を見学しました。

汚水を綺麗な水へ浄化する一方、汚水から取り除いた固形物などは、脱水した後、燃やされて灰になり、有効活用されていることを学びました。

また、特に子どもたちが興味を持ったのは微生物。汚水を浄化する過程の中で、微生物は汚水中の有機物を栄養分として食べて水を綺麗にしています。一方で、微生物は大量の油が流れてくると分解が間に合わないことがあるので、油をできるだけ流さないようにしてほしいという話もありました。参加した親子は、顕微鏡で見た微生物の活発な動きを見て、その生命力と環境保全に果たす役割を学びつつ、日々の生活の中に、水を大切にするための取組があることを実感していました。

東部浄化センターの事業は、SDGsの目標6「安全な水とトイレを世界中に」に直接結びついており、限りある水資源を将来にわたり安全に利用していくための地域社会の基盤となっています。参加者は、水の循環は常に繰り返され、川や海に戻り、やがて蒸発して雨となり再び生活用水となるという水循環のプロセスを学ぶことで、水資源の持続可能な利用について考える機会を得ていました。



▲地産地消をテーマにした弁当

◆地元食材がつなく食と地域

お昼は地産地消をテーマにしたお弁当を食べました。

地産地消は、自分たちの地域でとれた野菜やお肉を、その地域で食べることです。近くで作って近くで食べると、輸送時のエネルギーがかからず、二酸化炭素の排出が少なくなることから、環境にやさしい取組と言われています。また、地産地消を心掛けることで、地域の食文化との結びつきがより豊かになり、地域経済が活性化することにもつながります。

ロジェ・ア・ターブル

住所 長野市東町142-2 shinkoji北棟1F

大豆の講義、工場見学

マルコメ株式会社

「日本古来の発酵技術を通じて、生活者のすこやかな暮らしに貢献する」という企業理念のもと、味噌や糀商品、大豆のお肉などの食品を開発・製造しています。

住所 長野市安茂里883番地



▲▼味噌の食べ比べ



▲大豆についての講座



▲マルコメグループの商品を取り扱う直売所

◆大豆の可能性

マルコメ株式会社では、大豆とSDGsの繋がりについての講義を受けました。大豆が持つ多様な機能や環境面での貢献が詳しく説明され、参加者一人ひとりが食の持続性について考える機会となりました。

まず、大豆は高たんぱくでありながら、畜産物に比べて環境負荷が著しく低いという特徴があるということについて説明がありました。例えば、牛と比べると大豆を生産する際の温室効果ガス排出量は大幅に抑えられます。また、今後、世界の人口増加により食肉需要が増加すると予想されており、現在の畜産業のモデルでは供給が追いつかなくなる可能性が指摘されているということについてもお話がありました。食肉の生産を増やせば問題が解決するようにも思えますが、牛などを育てるためには大量の穀物が必要になり、これに伴う森林破壊、資源不足という課題が存在します。そこで、食肉と同じたんぱく質を摂取するために大豆を育てれば、水や飼料資源も大幅に少なくてすむということでした。

こうした大豆の環境的・栄養的価値を踏まえ、持続可能な食糧生産の観点から、大豆を活用した製品、お肉のような食感の大豆ミートの注目が高まっていることも紹介されました。

参加者は、味噌の製造工程の見学や味噌の食べ比べを通して、味噌の原料となる大豆という作物が持つ多面的な価値を肌で感じ、素材一つで環境保全や食の持続性に大きく貢献できるということ学びました。



豊穡の地を巡る川中島の戦いを超えて、持続可能な未来へ ～川中島白桃と平和、そしてSDGsへの挑戦～



▲長野市展示ブース



▲「川中島白桃」を五感で楽しむ木のオブジェ



▲「川中島白桃」体験型ブース

◆地方創生SDGsフェス

2025年5月、日本国際博覧会（EXPO2025大阪・関西万博）において、日本全国の地方創生SDGsに取り組む自治体が一堂に会するイベント「地方創生SDGsフェス」が開催され、長野市も出展しました。このイベントは、人気ゲーム「桃太郎電鉄」とコラボレーションしており、桃太郎電鉄の世界観が表現された会場内には、北海道から沖縄まで、全国各地の魅力あふれるブースが並びました。来場者は、ゲーム感覚で楽しく会場内を巡りながら、各地の特色ある取組を体験・体感できる内容となっていました。

◆長野市展示ブース

長野市の展示は、持続可能な農業の可能性を探る「農業×戦国」をテーマにした体験企画。「川中島の戦い」の歴史的舞台であり、現在は豊かな自然と調和した農業が根付く川中島地域を軸に、特産品「川中島白桃」を五感で楽しむ木のオブジェや、「川中島の戦い」の世界に没入できるVR体験などを展開しました。かつて戦

くさがあった川中島で、今は平和と豊穡を象徴する「川中島白桃」が実る。その背景には、気候変動などの課題に立ち向かいながら、持続可能な農業を実践する農家の挑戦と努力があります。こうした“現代の挑戦者”たちを目の当たりにして、戦国の対立から持続可能な未来へと移り変わる姿について考えを巡らせ、世代や出身地を超えて、SDGsが決して特別なものではなく、自分たちの暮らしや地域の文化と密接に関わっていることを表現しました。

◆出展の成果

上杉謙信や武田信玄が戦ったことで知られる「川中島の戦い」が、日常の食卓を彩る「川中島白桃」へと繋がり、そして持続可能な未来へと繋がっている。長野市のブースは、そんな“時代を超えたつながり”を体感し、SDGsや持続可能な未来を考えるきっかけを来場者に届けました。

最後に、今回の展示は、「誰一人取り残さない」というSDGsの理念を象徴するものでもあったように感じます。市民・企業・行政など、それぞれの立場でSDGsについて考えることから始まり、協働することによって、より持続可能な社会に近づくことができます。一人の力には限界がありますが、多様なつながりが広がればSDGsの達成へ向けた大きな力になる。そうした連携の思いを共有できたことこそ、今回の出展の大きな学びとなりました。

～「ながの」の未来にむけて、今できること～

「ながのSDGs information」では、長野地域連携中枢都市圏9市町村（長野市・須坂市・千曲市・坂城町・小布施町・高山村・信濃町・小川村・飯綱町）にある企業や団体のSDGsに関する取組を紹介しています。圏域間のパートナーシップや取組を通して、持続可能なまちづくりを推進していきます。

他の詳細は
こちら



*長野市は、「SDGs未来都市」に認定されています。
「環境共生都市「ながの」の実現」を目指して活動に取り組んでいます。
…「SDGs未来都市」とはSDGsの達成に向けた優れた取組を提案する都市として、国（内閣府）が選定するものです。

詳細ページは
こちら



〈発行〉 令和8年3月
長野地域連携中枢都市圏 事務局
（長野市役所 企画課）
〒380-8512 長野市大字鶴賀緑町1613番地
TEL:026-224-5010 FAX:026-224-5103